

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

今村圭介、ダニエル・ロング編『アジア・太平洋における日本語の過去と現在』

本書は、アジア・太平洋の旧植民地等における日本語の影響について、「第1部 各地に残存する日本語」「第2部 言語接触と接触言語」「第3部 日本語からの借用」の3部に分け、各地の状況を記述した論文15編をおさめる論文集である。

第1部には「パラオにおける残存日本語（今村圭介）」「マリアナにおける残存日本語（ダニエル・ロング）」「台湾日本語世代の日本語習得と言語能力（甲斐ますみ）」「朝鮮と旧満州における帝国日本語（黄永熙）」「オホーツク海沿岸域における日本語の残存（朝日祥之）」以上5編を収録する。第2部には「アンガウル島で発生した「準ビジン」（ダニエル・ロング）」「台湾・宜蘭地域に生まれたクレオール（真田信治）」「旧満洲（中国の東北地域）に生まれた「協和語」（張守祥）」「旧植民地等における日本人住民の言語使用（甲賀真広）」以上4編を収録する。第3部には「南洋における日本語借用語の特徴（今村圭介）」「南洋における日本語借用語の意味変化（ダニエル・ロング）」「台湾における日本語借用語（合津美穂）」「中国語東北方言における日本語借用語（白曉萌・張守祥・甲賀真広）」「韓国語・朝鮮語における日本語借用語（李舜炯・高木文也）」「旧植民地等における片仮名の借用と利用（今村圭介）」以上6編を収録する。（遠藤佳那子）

(2021年10月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 431頁 定価7,920円 ISBN 978-4-8234-1098-7)

田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 近代編』

本書は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果のひとつである。巻頭に「コーパスによる近代語の研究（田中牧郎）」「近代語の資料とコーパス（橋本行洋）」が〈展望〉として示され、文法、語彙、表記、資料、各分野の〈論文〉11編、読者がコーパスを利用する際の手引きとなる〈解説〉4編から構成される。

収載される論文は以下のとおりである。「逆接仮定条件史におけるトテの位置づけ——近代文法史記述のあり方再考——（矢島正浩）」「『開化啓蒙書』の逆接表現形式——「スタンダード言語」としての性質を探る——（宮内佐夜香）」「大正期の子供向け文章の語法——教科書と童話の関係——（小島聡子）」「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙——順接の接続詞を例に——（近藤明日子）」「近代語彙の語種構成——時代差・文体差・読者差——（田中牧郎）」「近代の和語における意味と表記の結びつきの変化——動詞アウを事例に——（高橋雄太）」「近現代漢語における異表記の実態と変化（間瀬洋子）」「コーパスによる言語変化の実時間研究——検定問題と異体字問題——（横山詔一）」「『上方はなしコーパス』について——近代大阪方言の速記落

語——（竹村明日香）」「近代語資料としての『史談会速記録』（岡島昭浩）」「言語記事データベース」について（新野直哉）」、以上からなる。

また、解説として『『日本語歴史コーパス 明治・大正編』の構成——データと公開形態——（小木曾智信）』『『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』解説（間淵洋子・近藤明日子）』『『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅱ教科書』解説（服部紀子）』『『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料』解説（近藤明日子）』を収載する。（遠藤佳那子）（2021年11月19日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 375頁 定価4,400円 ISBN 978-4-8234-1097-0）

李在鎬編『データ科学×日本語教育』

本書は、データに基づいて言語現象にアプローチする領域であるデータ科学と日本語教育の関連について論じる書である。教育のオンライン化に伴って学習者の学びの実態が電子データによって集められるようになった。それらを客観的指標による分析によって教育現場の課題解決にどのように役立てるのか、また、日本語教育分野においてデータとは何かという理論的考察を、「第1部 方法編」、「第2部 事例編」の2部構成でまとめている。

「はしがき」につづき、「第1部 方法編」には、「1 データ科学と日本語教育（李在鎬）」、「2 データとは何か（李在鎬）」、「3 小規模コーパスの構築方法（村田裕美子）」、「4 仮説に基づいた最適・最短なコーパス頻度解析——様態と結果の副詞の動詞句内における定位置と動詞との共起パターン——（玉岡賀津雄）」、「5 言語テストの分析方法（小野塚若菜）」。「第2部 事例編」には、「6 リズムの習得に関する定量的分析（木下直子）」、「7 漢字字形の特徴が非漢字圏初級日本語学習者の漢字認識処理に与える影響——漢字学習前後における処理傾向の比較分析——（早川杏子、本多由美子）」、「8 美化語研究と計量分析（滝島雅子）」、「9 日本語母語話者・学習者の語彙運用と情報構造——名詞と助詞の共起関係を中心に——（鯨井綾希）」、「10 日本語接続表現の計量的分析に基づく指導法の提案（阿辺川武、仁科喜久子、八木豊、ホドシチェック・ボル）」、「11 学習者の話し言葉と書き言葉（村田裕美子）」、「12 日本語の学術的文章を対象とした計量分析（三谷彩華）」、「13 わかりやすい日本語に関する定量分析（大崎健一）」、「14 接続詞の直後の読点をどう指導すべきか（岩崎拓也）」、「15 日本語教育の歴史的データとしての教科書戦後日本語教科書はいかなることばを教えてきたのか（田中祐輔）」。

巻末に「索引」、「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）（2021年11月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 328頁 定価3,300円 ISBN 978-4-8234-1099-4）

中村浩一郎編『言語のインターフェイス・分野別シリーズ第1巻 統語論と言語学諸分野とのインターフェイス』

都田青子・田中真一編『言語のインターフェイス・分野別シリーズ第2巻 音声学・音韻論と言語学諸分野とのインターフェイス』

西原哲雄編『言語のインターフェイス・分野別シリーズ第3巻 形態論と言語学諸分野とのインターフェイス』

米倉よう子編『言語のインターフェイス・分野別シリーズ第4巻 意味論・語用論と言語学諸分野とのインターフェイス』

本シリーズは、2019年に刊行された『言語におけるインターフェイス』（西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一（編）、開拓社）のなかの4章（統語論、音声学・音韻論、形態論、意味論）を取り上げ、それぞれ分冊化したものである。ことばの本質の把握には多角的な分析が求められることを前提に、統語論、音声学・音韻論、形態論、意味論・語用論の分野をインターフェイス（各研究分野間の相互作用）という視点から最新の研究動向を踏まえてまとめられている。

本シリーズの『第1巻 統語論と言語学諸分野とのインターフェイス』では、言語の構造構築を担う統語論と音韻論、形態論、意味論、文の引用、情報構造とのインターフェイスを取り上げる。「第1章 統語論と音韻論のインターフェイス（土橋善仁）」、「第2章 統語論と形態論のインターフェイス（岸本秀樹）」を含む全5章から成る。

『第2巻 音声学・音韻論と言語学諸分野とのインターフェイス』では、英語史、野球の応援歌、役者の台詞、絵本、子どものスピーチエラー、ディスレクシアと幅広いことばに関する身近なテーマを取り上げる。「第1章 音韻論と統語論のインターフェイス——英語史に焦点を当てながら——（大沢ふよう）」、「第4章 音韻論と言語発達のインターフェイス——オノマトベと絵本に焦点を当てながら——（都田青子）」を含む全6章から成る。

『第3巻 形態論と言語学諸分野とのインターフェイス』では、形態論の枠組みを中心に、音声学・音韻論、方言、強勢、語彙意味論、日本語形態論といった言語学研究の諸分野とのインターフェイスを取り上げる。「第1章 形態論と音声学・音韻論とのインターフェイス（西原哲雄）」、「第2章 方言でみるカテゴリーと形式のインターフェイス（島田雅晴）」を含む全5章から成る。

『第4巻 意味論・語用論と言語学諸分野とのインターフェイス』では、意味論・語用論と文法化、言語類型論、歴史言語学、「視点（捉え方）」、子どもの言語発達、選択体系機能言語学、コーパス言語学とのインターフェイスを取り上げる。「第1章 意味論・語用論と文法化のインターフェイス（大橋浩）」、「第3章 意味論・語用論と歴史言語学のインターフェイス（米倉よう子）」を含む全6章から成る。

各巻末に、「参考文献」、「索引」、「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2021年11月24日発行 開拓社刊 A5判横組み、定価各2,970円、第1巻240頁 ISBN 978-4-7589-

1356-0, 第2巻228頁 ISBN 978-4-7589-1357-7, 第3巻210頁 ISBN 978-4-7589-1358-4, 第4巻210頁 ISBN 978-4-7589-1359-1)

国立国語研究所編『日本語の大疑問』

国立国語研究所に寄せられたことばの疑問に対して、研究所関係者が回答した記事をまとめた1冊である。『新「ことば」シリーズ』で公開された記事と、国立国語研究所のウェブサイト「ことばの疑問」に公開された記事から、37名による計41編が収録される。

本書は次のようなトピックから構成されている。「第1章 どうも気になる最近の日本語」「第2章 過剰が無礼か？敬語と接客ことばの謎」「第3章 世界のことばと日本のことば」「第4章 どちらを選ぶ？迷う日本語」「第5章 便利で奇妙な外来語」「第6章 歴史で読み解く日本語のフシギ」、以上6章である。SNS上で用いられる表現や絵文字、日常生活に欠かせない敬語表現の数々、他言語との関係など、多岐にわたる日本語の疑問とその回答が、奥深いことばの世界への入り口となっている。(遠藤佳那子)
(2021年11月25日発行 幻冬舎刊 新書判 262頁 定価1,012円 ISBN 978-4-344-98637-4)

今井邦彦・岡田聡宏・井門亮・松崎由貴編『語用論のすべて——生成文法・認知言語学との関連も含めて——』

本書は、語用論の全体像を捉えることに加え、生成文法・認知言語学と関連させながら3つの理論の理解を促すことをめざし、「語用論入門」「入門編」「発展編」と3部構成でまとめられた書である。

「はじめに」につづき「第Ⅰ部 語用論入門」には「第1章 語用論とは？(今井邦彦)」,「第Ⅱ部 入門編」には,「第2章 言語行為理論(1)——3つの言語行為(岡田聡宏・松崎由貴)」,「第3章 言語行為理論(2)——間接言語行為・適切性条件(岡田聡宏・松崎由貴)」,「第4章 グライスの語用論(1)——協調の原理と会話の格率(井門亮)」,「第5章 グライスの語用論(2)——会話の含意(井門亮)」,「第6章 新グライス派の語用論とポライトネス理論(井門亮)」,「第7章 関連性理論(1)——関連性の原理と解釈の手順(岡田聡宏)」,「第8章 関連性理論(2)——明意と暗意(岡田聡宏)」,「第9章 関連性理論(3)——語彙語用論と亜人格性・心の理論・モジュール(岡田聡宏)」。「第Ⅲ部 発展編」には,「第10章 関連性理論と生成文法(今井邦彦)」,「第11章 言語科学とは(今井邦彦)」,「第12章 生成文法に対峙(?)する認知言語学(今井邦彦)」。「巻末に「索引」と「執筆者紹介」を付す。(椎名渉子)
(2021年12月10日発行 開拓社刊 A5判横組み 240頁 定価3,080円 ISBN 978-4-7589-2358-3)

高橋忠彦・高橋久子・古辞書研究会編著『意味分類体辞書の総合的研究』

本書は、「研究編」と「本文・注釈・索引編」の上下二巻からなる。上巻は、中世古辞書の形成・発展・変化において意味分類体の辞書が与えた影響の大きさを明らかにすることを目的として編まれた、論文集である。下巻は、編著者所蔵の文献二種を紹介することを目的とし、それぞれの影印・翻字本文・注釈・語彙索引・漢字索引を収録する。

上巻は「第1部 意味分類体辞書の研究」「第2部 慶長本頓要集の研究」「第3部 高橋本和名集の研究」から構成されており、合計30編の論文を収載する。第1部は、「中世意味分類体辞書総論（高橋忠彦）」「中世辞書の四つ仮名（高橋久子）」「頓要集ならびに撮壤集の名義について（高橋忠彦）」「亀井本和名集の特徴（高橋忠彦）」「村口本下学集の研究（崔美月）」「下学集所収語彙の性格——態芸門・言辞門・量字門——（高橋久子）」「成簀堂文庫蔵用心集の系統について（高橋忠彦）」「伊京集と桂本佚名古辞書（高橋久子）」「印度本節用集と和名集類の関係——唐絵筆者の扱いをめぐる——（中原友美子）」「七卷本世俗字類抄の補綴資料（高橋忠彦）」「撮壤集と桂本類の関係（高橋忠彦）」「天理本和名集と類集文字抄の関係について（冨塚一恵）」「天理本和名集の方言について（松倉めぐみ）」「通要古紙の編纂について（高橋久子）」「琉球和名集について（高橋忠彦）」「大南国語について（高橋忠彦・La Minh Hang（呂明恒））」以上16編の論文からなる。第2部は、「慶長本頓要集概説（高橋久子）」「慶長本頓要集の漢字表記について（宮本淳子・田中秀征）」「慶長本頓要集の方言（菊地圭介・山口純礼）」「詞雑字部所収語彙の位相（李妍）」「物造始部の原資料について（高橋忠彦・中原友美子）」「有坂本類による増補（冨塚一恵）」「下学集による増補（高橋久子）」「天理本類による増補（市川加奈）」「倭玉篇による増補（菊地圭介・近藤健次）」「往来物による増補（前嶋深雪・小杉麻美）」「村上文庫本継忘集との関係（高橋忠彦）」「慶應本色葉集との関係（高橋久子）」以上12編の論文からなる。第3部には、下巻に紹介される高橋本和名集に関して2編の論文をおさめる。（遠藤佳那子）（2021年12月10日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 1502頁（上巻674頁、下巻828頁） 定価30,250円 ISBN 978-4-8386-0762-4）

仁田義雄著『国語問題と日本語文法研究史』

本書は二部構成となっており、「第1部 言語・国語問題をめぐって」では、社会や国家、民族と、言語との関係について歴史的な観点から論じる。「第1章 言語的不平等と言語的抑圧」「第2章 「国語」を考える」「第3章 上田万年と国（民）語の創出」「第4章 小林英夫と時枝誠記——言語問題への言説をめぐる——」「第5章 自民党文教（制度）調査会と国語施策」を収載する。

「第2部」は日本語学史の概説となっている。「第6章 文法研究を中心とした日本語研究史大概」は、従来の概説書には少ない、明治期の国語施策や大槻文彦以降の文法研究の流れについても記述されている。また「第7章 日本語記述文法の研究対象として

の自立化——時代背景の中でその歩みを眺める——」は、著者自身の研究の歩みを通して描かれる文法研究史となっている。(遠藤佳那子)

(2021年12月10日発行 ひつじ書房刊 四六判横組み 233頁 定価3,080円 ISBN 978-4-8234-1114-4)

早稲田大学日本語学会編『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集 第1冊 言葉のしくみ』

本書は早稲田日本語学会設立60周年を記念した論文集の第1冊目である。本書には、音韻、文字表記、語彙の分野に関わる論文21編を収載する。

本書の構成は以下のとおりである。「オ段長音の開合区別 謡曲はいつ、なぜ、それを断念したのか(坂本清恵)」「和語名詞の連濁——「カワ(川)」「ホタル(蛍)」を後部成素とする複合語を中心に——(鈴木豊)」「『日粵会話』とその音注表記(馬之濤)」「論議書にみえる出合の資料性について(上野和昭)」「漢語アクセントの歴史的連続性についての語彙的検討——2字2拍漢語の基本型化と類別語彙相当の認定をもとに——(加藤大鶴)」「『西周文書・稿本(七)』のアクセント——『日本大辞書』と方言アクセントを手がかりに——(山岡華菜子)」「音声の定量的研究法をかんがえる——九州の二型アクセントを例に——(吉田健二)」「行草書体と楷書体(今野真二)」「日本語と中国語に借用された字喃で表記されるベトナム語——辞典に採用された「𣵀(バ)の漢字圏における伝播と変容に関する字誌——(笹原宏之)」「『万葉用字格』における用字法分類用語の再検討(澤崎文)」「日本語表記の「日常」——児童にとっての名前とその表記——(佐藤栄作)」「「表記の手引き」類に準拠したテキストにおける表記のゆれ——実態調査と発生理由の検討——(増地ひとみ)」「歴史コーパスに対する話者情報付与の試み——洒落本コーパス構築上の課題を中心に——(市村太郎)」「近世における「気味」素描——感覚・情意をめぐって——(池上尚)」「坪内逍遙『一読三嘆当世書生気質』の外国語・外来語の考察——初版本と『逍遙選集』所収本文との対比から——(木村義之)」「昭和初期の医学用語改訂の実践——国語改革運動の一環として——(遠藤織枝)」「現代の類義語の中にある歴史(中川秀太)」「オノマトペの使用における健聴生徒と聴覚障害生徒の比較(田中優子)」「留学生のための数学の基礎的専門語」の選定(小宮千鶴子)」「〈資料〉村田春海『假字大意抄』翻刻(高松正毅)」「『徒然草嫌評判』の考察(すぎもとつとむ)」, 以上である。(遠藤佳那子)

(2021年12月10日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 384頁 定価7,700円 ISBN 978-4-8234-1118-2)

早稲田大学日本語学会編『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集 第2冊 言葉のはたらき』

記念論文集の第2冊目であり、23編の論文からなる。本書には、文法、文章・文体・談話、待遇表現、言語教育・言語施策などに関わる論文を収録する。

本書の構成は以下のとおりである。「奈良時代の係助詞「なも」に関する考察(森野崇)」「希望表現における意味と形式——万葉集を例に——(仁科明)」「文末思考動詞と推量の

助動詞——「と思う」と「べし」の類似性を中心に——（渡辺由貴）」「わけだ」の文の用法（山口佳也）」「だから」及び「～わけだ」、「～のだ」の情意表出的用法——その成立の背景を日本語の構文的特徴に探る——（加藤薫）」「連体修飾節の構造と意味——両者のずれから見た節のタイプの連続性——（松木正恵）」「副詞としてのジジツの意味・用法——〈事実〉として示される事柄の分類を中心に——（荻宿紀子）」「主題のない文の現れ方——近代短編小説の場合——（石出靖雄）」「後期咄本の構造の変化・内容の変化（三原裕子）」「鮎川哲也『ペトロフ事件』の初期バージョンに見られる、旧満洲地域における「日中ピジン」（岡田祥平）」「芥川龍之介の小説における冒頭の表現（高野敦志）」「別役実のウソと笑い——『けものづくし』『鳥づくし』『魚づくし』『別役実の人体カタログ』を例に——（木村寛子）」「文章・談話における日本語母語話者と日本語学習者の「んだけど／んですけど」の使用状況——用法、前接要素、話題展開に着目して——（河内彩香）」「エントリーシートの推敲支援を通じた文章指導の実践（寺田智美）」「明治期東京語における〈行く・来る〉の謙讓語の使用（山田里奈）」「下位待遇表現の体系——いわゆるマイナス待遇・卑語・軽卑・卑罵などの表現をめぐる——（森山卓郎）」「相対敬語とは何か 相対敬語の類型化に基づく敬語運用の考察（澤田淳）」「待遇コミュニケーションにおける「行動展開表現」の位置づけ（蒲谷宏）」「あらたまりと丁寧文（坂本恵）」「外国人留学生在が求める資質・能力に関する一考察（永岡悦子）」「ニューノーマル（新常态）下における社会実装型日本語教育の提案——アウトリーチタイプの日本語ユーザーへの支援から——（宮崎里司）」「国語施策」をめぐる一考察（石黒圭）」、以上である。（遠藤佳那子）
 （2021年12月10日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 419頁 定価8,800円 ISBN 978-4-8234-1119-9）

李乃琦編『一切経音義古写本の研究』

『一切経音義』は、平安時代古辞書『新撰字鏡』と『類聚名義抄』の基幹資料であり、国語学研究において貴重な資料であるが、日本に現存する古写本については未だ十分な研究がなされていない。これを踏まえ、本書では『一切経音義』古写本の系統分類を検討し、『類聚名義抄』、『新撰字鏡』それぞれとの関係を検討する。

本書の構成は次のとおりである。「緒言」「第1章 一切経音義についての先行研究」「第2章 一切経音義の系統分類」「第3章 一切経音義と原撰本類聚名義抄」「第4章 一切経音義古写本と天治本新撰字鏡」「第5章 一切経音義の敦煌・吐魯番断片群」「結論」からなる。巻末に「付録」として「一切経音義翻字の方針」「一切経音義の翻字」「一切経音義古写本の画像」が収載される。（遠藤佳那子）

（2021年12月15日発行 汲古書院刊 A5判横組み 174頁 定価5,500円 ISBN 978-4-7629-3659-3）

三宅和子・新井保裕編『モビリティとことばをめぐる挑戦——社会言語学の新たな「移動」——』

本書は、モビリティとことばが人々の言語生活の実態の形成にどう関連し相互に影響を与えているのかを通じて今後の社会言語学の課題を示すものである。「モビリティ」

とは人の空間的移動にとどまらず、モバイル・メディアやPCなどの情報通信機器とそれが実現する活動、社会的・時間的移動などが相互に関連しながら現代の私たちの生活に影響を与えるものなどを広く含み、それらを軸にした論考がまとめられている。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」につづき、「第Ⅰ部 言語研究におけるモビリティの視点」には、「序章 モビリティ、21世紀に問われる社会言語学の課題（三宅和子）」、「第1章 言語の融合と分離（フロリアン・クルマス／三宅和子編訳）」。「第Ⅱ部 移動と定住をめぐる言語コミュニティの形成と変容」には、「第2章 朝鮮学校コミュニティにおける韓国朝鮮語——移動しない子供たちにとって民族語を使う意味とは——（生越直樹）」、「第3章 ハワイ語の再活性化における話者性——第二言語使用と混血——（古川敏明）」、「第4章 多言語社会ブータンの下町市場にみる共生の言語動態——「第3の媒介言語」の起用と「仲介者」の機能——（佐藤美奈子）」、「第5章 台湾語における文字選択と「台湾意識」（吉田真悟）」。「第Ⅲ部 モバイル・ライブズの多様な言語実践」には、「第6章 多文化社会への移動によるリテラシー問題——オーストラリア香港系移民の事例を通して——（サウクエン・ファン）」、「第7章 中国朝鮮族の言語をめぐる選択と戦略——地域差と性差を中心に——（新井保裕）」、「第8章 国境を越える緑月旗の記号的役割——日豪のパキスタン料理店に見られる凡庸なナショナリズム——（山下里香）」、「第9章 言語ポートレートから見る多層アイデンティティ——「アイデンティティの戦争」から複言語使用者へ——（岩崎典子）」。

各章末には、各章の執筆者によるコラムが付される。巻末に、「あとがき」、「執筆者紹介」がある。（椎名渉子）
 （2021年12月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 284頁 定価3,520円 ISBN 978-4-8234-1128-1）

古屋彰著『家持「歌日誌」の文字世界』

著者による『万葉集の表記と文字』（1998）、『万葉集用字覚書』（2009）に次ぐ、万葉集の文字表記について論じる著である。万葉集に最多の作品を残し、その編纂にも深くかかわったと見なされる大伴家持の文字選択をたどり、その背後にある家持の人間性にも注意を払いつつ巻二十後半部への大伴三中将と説などについて検討する。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」「序章 続日本紀と家持「賀陸奥國出金詔書歌」」「第1章 巻十七冒頭部歌群の文字世界」「第2章 巻十七本体部冒頭の短歌群」「第3章 「述戀緒歌」と「思放逸鷹夢見感悦作歌」」「第4章 巻十八冒頭造酒司令史田邊福麻呂来越時短歌群」「第5章 巻十八越前國掾大伴宿祢池主来贈歌二つ」「第6章 巻十九——あるがままの表記体——」「終章 巻二十の付加とその文字世界」「別章 聖德皇子片岡遊行説話——歌謡表記をめぐる諸問題——」「あとがき」、以上である。（遠藤佳那子）
 （2021年12月22日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 322頁 定価7,700円 ISBN 978-4-7576-1016-3）

町田章・木原恵美子・小熊猛・井筒勝信著『認知日本語学講座 3 認知統語論』

本講座は、文法論、意味論の研究だけでなく、音韻・形態論、語用論、歴史言語学、

言語類型論などの言語学の研究領域を視野に入れた体系的なものである。これまでの認知言語学の研究書の多くは英語を中心とする欧米の言語研究が中心となり文法と意味の考察がなされてきたが、認知言語学の方法論、分析法を日本語の研究に適用した点が新しい。第3巻である本書でも、従来の統語論の研究書とは一線を画し、領域横断的・学際的視点から Ronald W. Langacker の提唱する認知文法の枠組みを用い日本語・多言語の文法現象を捉える。

「認知日本語学講座・刊行にあたって」, 「まえがき」につづき, 「第1章 認知文法の基本概念 (町田章)」, 「第2章 構文分析における主要モデル (木原恵美子)」, 「第3章 日本語らしさと認知文法 (町田章)」, 「第4章 概念の構築と格助詞スキーマ (町田章)」, 「第5章 構文拡張の認知メカニズム (町田章)」, 「第6章 非主節性の認知統語論: 非主節的統語要素の意味と機能 (小熊猛・井筒勝信)」, 「あとがき——認知文法の展開—— (町田章)」。巻末に「参考文献」, 「索引」を付す。(椎名渉子)

(2022年1月25日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 382頁 定価4,950円 ISBN 978-4-87424-888-1)

本多由美子著『二字漢語の透明性と日本語教育への応用』

本書は、非漢字系日本語学習者の漢字学習において、語の意味を理解するための漢字教育を考える際に二字漢語の透明性の観点が重要であるとし、その実態を捉え日本語教育への応用を検討する書である。二字漢語のなかには、二字漢語の意味とその構成漢字の意味が対応して結びつくものと結びつきにくい語がある。こうした透明性について辞書の調査に加えて非漢字系学習者への調査も取り入れながら、実態を捉えていく。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」につづき, 「第1部 二字漢語の透明性の実態」には「1章 「二字漢語の透明性」とは」, 「2章 辞書の記述に基づく二字漢語の透明性」, 「3章 学習者と母語話者による透明性の判断傾向の相違」, 「4章 意味の結びつきと出現頻度による構成漢字の分析」, 「5章 二字漢語とその構成漢字の意味の結びつきにおける「仲介語」の検討」, 「6章 高頻度の二字漢語の透明性と表記の傾向」, 「7章 二字漢語の透明性の通時的変化」。「第2部 二字漢語の透明性の日本語教育への応用」には, 「8章 二字漢語の透明性の活用による負担軽減の方法」, 「9章 透明性の調査結果を活用した学習案の検討」, 「10章 二字漢語の透明性リストの作成」, 「11章 透明性を利用した「初級漢字語リスト」の教材案」。「おわりに——まとめ、今後の課題・展望——」。巻末に, 「引用文献」「調査資料」「初出一覧」「あとがき」「事項索引」「漢字・漢字語彙索引」を付す。(椎名渉子)

(2022年2月22日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 334頁 定価5,720円 ISBN 978-4-87424-889-8)

窪菌晴夫・守本真帆著『プロソディー研究の新展開』

国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音

声と文法」のうち、音声研究班による研究成果をまとめた論文集である。

本書は以下 13 編の論文からなる。「第 1 章 式保存型接尾辞「一方」の音調形成（那須昭夫）」「第 2 章 日本語のテキストセッティングと音韻制約（田中真一）」「第 3 章 日本語ピッチレンジの社会音声学的研究（佐野真一郎・ギュモ セレスト）」「第 4 章 動詞に助詞・助動詞がついたときのアクセント再考（小川晋史）」「第 5 章 近畿方言におけるアクセント式の予測可能性——茶色のきつねと茶色のきりん——（広瀬友紀・伊藤愛音）」「第 6 章 不定語のアクセント・イントネーション——日本語諸方言におけるバリエーション——（佐藤久美子）」「第 7 章 天草市本渡方言における呼びかけイントネーションの言語学的指定（松浦年男）」「第 8 章 熊本県八代市坂本町上深水方言のアクセント単位拡張現象——名詞を左端に持つ構造を中心に——（山田高明）」「第 9 章 鹿児島方言のアクセントの弁別特性について（窪蘭晴夫）」「第 10 章 琉球祖語の韻律体系について（松森晶子）」「第 11 章 北琉球奄美喜界島方言における動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー（白田理人）」「第 12 章 南琉球宮古語多良間方言における「名詞＋動詞」構造の複合名詞アクセント（セリック・ケナン、青井隼人）」「第 13 章 日本人英語学習者の弱化母音の実現について——予備的コーパス調査——（北原真冬・田嶋圭一・米山聖子）」。（遠藤佳那子）

（2022 年 2 月 23 日発行 開拓社刊 A5 判横組み 288 頁 定価 4,180 円 ISBN 978-4-7589-2363-7）

飛田良文編『シリーズ〈日本語の語彙〉6 近代の語彙 2——日本語の規範ができる時代——』

全 8 巻のうち第 6 巻にあたり、これをもって本シリーズは完結した。幕末から明治における日本語の語彙の問題を、「第 1 部 江戸語の流れ」「第 2 部 西洋文化の導入」「第 3 部 日本語の規範「標準語」とは何か」、以上 3 つの軸を据えて論じる。

各部の構成は次のとおりである。第 1 部に「第 1 章 仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』の語彙（石井久美子）」「第 2 章 三遊亭円朝 人情話の語彙（金子弘）」、第 2 部に「第 3 章 森鷗外の語彙——『うたかたの記』『文づかひ』の外來語——（新野直哉）」「第 4 章 夏目漱石の語彙——『心』上（先生と私）の漢語——（小野正弘）」「第 5 章 芥川龍之介の語彙（関口安義）」「第 6 章 山本有三の語彙（田中牧郎）」「第 7 章 永井荷風の語彙——外來語を中心に——（玉村楨郎）」、第 3 部に「第 8 章 国定教科書「国語読本」の語彙（飛田良文）」「第 9 章 国定教科書「地理」の語彙（斎藤達哉）」「第 10 章 国定教科書「修身」の語彙（鳴海伸一）」「第 11 章 ラジオ放送の語彙（塩田雄大）」「第 12 章 漫画『のらくろ』に使われている軍隊用語とその影響（木下哲生）」を収録する。（遠藤佳那子）

（2022 年 3 月 1 日発行 朝倉書店刊 A5 判縦組み 193 頁 定価 4,070 円 ISBN 978-4-254-51666-1）

窪蘭晴夫・朝日祥之編『言語コミュニケーションの多様性』

本書は 2020 年 10 月 3 日に開催された国立国語研究所主催の NINJAL シンポジウム「コミュニケーションの多様性」の成果をまとめたものであり、AI やコーパスなど多様

な言語資源を用いた論考が並ぶ。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 AI と対話（中島秀之）」、「第2章 丁寧表現形式「デス」の地域差——日本語諸方言コーパス（COJADS）から——（木部暢子）」、「第3章 対人配慮の歴史をどう捉えるか——『平家物語』の〈受諾〉〈断り〉表現をめぐる——（高山善行）」、「第4章 書き言葉・話し言葉における縮約形の実態——コーパスに基づく分析を通して——（小磯花絵）」、「第5章 ハワイとカリフォルニアに渡った日本人女性たちによる敬語と女性文末詞（朝日祥之）」、「第6章 日本語学習者の配慮の表現・行動から出発するコミュニケーションの対照研究（野田尚史）」、「第7章 日本語学習者のフィラーの習得と評価——中国語を母語とする日本語学習者3名を対象にしたケーススタディ——（石黒 圭）」、「第8章 自閉スペクトラム症の言語コミュニケーション（藤野 博）」、「第9章 NPCMJを用いた文構造の出現頻度に関する調査——主語省略文と受身文を例に——（プラシヤント・パルデシ、長崎 郁）」、「第10章 プロソディーの多様性と音声コミュニケーション（窪蘭晴夫）」。

巻末に、「索引」と「編者・執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2022年3月24日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 214頁 定価3,740円 ISBN 978-4-87424-894-2）

岸本恵実・白井純編『キリシタン語学入門』

本書は、キリシタン語学に関心のある人や、大学院・大学院生のための研究・教育上の手引き書となるべく編まれている。理論編と実践編に分かれており、理論編では概説や近年の研究成果の紹介がされ、実践編ではキリシタン文献の扱い方を学べるような構成となっている。また口絵・図版が豊富に掲載され、巻末には付録として、文献へのアクセス方法やポルトガル語・スペイン語・ラテン語の調べ方の案内などが掲載される。

本書の構成は次のとおりである。理論編は「1. キリシタン文献とその歴史（岸本恵実）」「2. 研究史（白井純）」「3. キリシタン時代の文法書（黒川茉莉・豊島正之）」「4. 印刷技術（白井純）」「5. 日本語学の枠組みを超えて（岸本恵実）」以上6編からなる。実践編は3部構成となっており、「6. キリシタン語学を知る」は「6.1. 日葡辞書（中野遙）」「6.2. 落葉集（白井純）」「6.3. 日本大文典・日本小文典（豊島正之）」「6.4. 羅葡日辞書（岸本恵実）」「6.5. 天草版ラテン文典（黒川茉莉）」「6.6. ドミニコ会コリヤード文典（岩澤克）」からなり、「7. キリシタン文学書・宗教書を知る」は「7.1. 日本語ローマ字本（口語）とCHJの使い方 天草版平家物語（川口敦子）」「7.2. 日本語ローマ字本（文語） サントスの御作業（白井純）」「7.3. 日本語国字本(1) どちらなさきしたん（白井純）」「7.4. 日本語国字本(2) ぎやどべかどる（折井善果）」「7.5. 写本 バレト写本（川口敦子）」からなる。「8. キリシタン版を読んでみる」では、より具体的に翻刻や翻字の仕方から注釈の付け方まで、手ほどきが示されている。（遠藤佳那子）

（2022年3月25日発行 八木書店出版部刊 B5判横組み 160頁 定価2,750円 ISBN 978-4-8406-2245-5）